

令和2年度

心の輪を広げる体験作文

障害者週間のポスター

入賞作品集

令和2年11月

兵庫県

令和2年度 心の輪を広げる体験作文 入賞作品 目次

小学生の部

最優秀賞

「私のおじいちゃん」

姫路市立手柄小学校

5年

西尾 泉希 1頁

中学生の部

優秀賞

「言葉」

加古川市立氷丘中学校

2年

松尾 佳音 2頁

優秀賞

「お手伝いしましょうか」

加古川市立氷丘中学校

3年

好井 愛結 3頁

奨励賞

「笑顔を繋ぐ短歌」

加古川市立氷丘中学校

3年

中本 千尋 5頁

奨励賞

「共生社会の実現のために」

加古川市立氷丘中学校

3年

中寺 志保 6頁

高校生の部

最優秀賞

「共に生きていくために」

関西創価高等学校

1年

田村 勇人 8頁

優秀賞

「偏見のない世の中へ」

兵庫県立龍野北高等学校

2年

中田 藍子 9頁

優秀賞

「障害という壁」

兵庫県立日高高等学校

2年

田中 真由 11頁

奨励賞

「普通って何？」

兵庫県立龍野北高等学校

1年

時澤 天空 12頁

奨励賞

「普通とは何か」

兵庫県立龍野北高等学校

3年

瀧北 有希 14頁

令和2年度 障害者週間のポスター 入賞作品 目次

最優秀賞	「主役」	加古川市立平岡中学校	1年	志水 結乃	16頁
優秀賞	「君の手と少しの勇気で繋がる心」	加古川市立氷丘中学校	2年	伊藤 瑚白	17頁
優秀賞	「きづいてほしいサインがある」	加古川市立氷丘中学校	2年	堀内 煌太	18頁
奨励賞	「心を1つに」	加古川市立山手中学校	2年	中井 菜々美	19頁
奨励賞	「やさしさが心の段差をなくす鍵」	加古川市立氷丘中学校	3年	和田 向日葵	20頁

令和2年度 心の輪を広げる体験作文 入賞作品

【小学生の部】 最優秀賞

「私のおじいちゃん」

姫路市立手柄小学校

5年

にしお みずき
西尾 泉希

私のおじいちゃんは、足のつけねがほねのがんになってしまったので6年前に足を切り取りました。昔の写しんを見かえしているとお姉ちゃんと運動会に参加しているすがたもありました。でも、今はほとんどすわりっぱなしです。

けれど1本足がなくてもできることは、たくさんあります。立ってしなくてもいい車いすバスケットの場合は近くの体育館で足の不自由な人が集まったり、不自由じゃない人も参加していっしょに楽しむことができます。手柄小学校のすみれ学級の友だちも参加していました。私もすみっこで乗ってみるとすごくスピードが出て楽しいけどむずかしかったです。

そのほかにも車いすでおさんぽに行ったりカードゲームをしたりします。手があるのでいっしょにご飯を食べることもできて、いつもみんなといっしょにわらって生活できます。

そして、いつもビールをのんで、テレビを見て、ねて、わらってい

るのでふつうのおじいちゃんと変わりません。

足が1本ないからって、何も出来ないわけじゃないし、足が1本ないからって何にでもちようせんしてみないとわからないから何もやらずに「できない！」なんて言ったらだめだということがすごくわかります。

だからわたしのおじいちゃんは、不自由なんかではなく、ただ足が1本ないだけだと私は思います。

おじいちゃんがいつまでも元気でいてほしいです。



【中学生の部】 優秀賞

「言葉」

加古川市立氷丘中学校

2年

松尾 まつお
佳音 かのん



みなさんは吃音という発達障害を知っていますか。吃音は単に滑らかに話せないといっても色々ありますが、主に三つの特徴的な症状があります。音のくり返し「連発」と、音の引き伸ばし「伸発」と、言葉を出せずに間があいてしまう「難発」です。そして男性が発症しやすく、8割程度は自然に治ると言われています。男女合わせた吃音者は日本におよそ百二十万人いると推定されています。私はその一人です。私は言葉が大嫌いでした。

母が言うには、私は保育園のときから吃音だったそうです。私が自覚したのは小学一年生のときです。授業の発表、音読、沢山の人の前でみっともなく連発になりました。保育園のときは誰にも指摘されなかったのが気づかなかったんでしょう。小学一年生から三年生までの間に周囲の人に指摘されたり、笑われたり同級生にいじめられたこともありました。きつと相手に悪気は無くてもおもしろがってるだけなんだろうけど、悪気が無くてもいじめにはなるし、悪気が無いいじめほど嫌なものはありません。笑われて、いじめられて、ざわついて、それが私のトラウマになってます。多分いじめてきた人達はすっかり忘

れて今日もどこかで笑っているのでしょう。本当は同じ経験をすればいいのと思えますが、それは無理なのでがまんします。

小学校で一番苦しかった出来事は、卒業式です。呼びかけで難発が出ました。練習のときも本番のときも。練習のとき、声が出なくて泣きそうになったけど、人もいるし頑張ろうと思えました。でも陰口は止まらず、言われているところに遭遇したときは心が折れそうでした。正直、陰で言われるより直接言ってくれた方がましなんですけど、人は自分が悪者になりたくないから陰で悪口を言います。

こんな感じで毎日いると不登校になりそうですよね。確かに毎日登校できていませんでしたが、それでもほぼ毎日登校していました。なぜなら勇気をくれた先生がいたからです。その先生は学校で怖いと言われていた先生でした。初めて話したのは小学一年生のとき、教室に行きたくないと下駄箱で泣いていたときにたまたま通りかかった先生が声をかけてくれて、抱き抱えて教室までつれて行ってくれました。その先生は四年生のとき担任になりました。怖いと言われていた先生は本当は優しくてあたたかく、生徒思いの先生でした。先生は私が五年生のときに、もつと偉くなるからと学校を去りました。でも卒業式に来てくれました。私は相変わらず声が出なくて保護者の人達がざわざわしていたけど、最後まで言えました。先生は私に「良かったよ。これからも自分のペースで人と違っていいから前に進め。」と言いました。涙が止まりませんでした。私は私でいいと言ってくれて、やっと誰かに認めてもらえた気がして嬉しかったです。

正直なところ今も学校が、人間が怖いんです。中学生になって死にたいと思うこともありました。だって言葉は敵にも見方にもなって、私

の人生にずっと必要なもので、絶対につき放せないものだから。そんな言葉が私は大嫌いで大好きです。

私の価値観、言葉への思い、吃音は全員が理解してくれるわけではないけど、理解してくれる人もいます。仲良くしてくれる人もいます。でも本当は一人がいい。けれど学校が教室が一人にさせてくれない。独りになれば陰口を言われる。言葉で傷つけて助け合ってて本当に怖い。そんなの被害妄想だと思われるかもしれませんが本当のことです。だから助けてほしくて、障害者や言葉の重みのことを理解してもらえたらいいなと思っています。

私は少しずつでも前に進んで、これから沢山笑います。私の大嫌いで大好きな「言葉」を聞いて話して書いて「普通」になりたいです。



【中学生の部】 優秀賞

「お手伝いしましょうか」

加古川市立氷丘中学校

3年

よしい あゆ
好井 愛結



母と一緒に近くのスーパーに行ったときのことである。店の前で車の若い男性の姿が見えた。その男性はリサイクルボックスの前で、ひざの上に、ペットボトルがいっぱい入った大きなナイロン袋をのせ、一つ一つ中へ入れていた。

そのときである。

「お手伝いしましょうか。」

母は何のためらいもなく、私に話しかけるかのように、普通に言葉かけた。

「いや、大丈夫です。」

男性は、ペットボトルを入れながら言った。母と男性は目を合わせて“大丈夫”とお互いに心で確認し合って別れた。そして母は、何もなかったかのように店のカゴを手にとり、買い物始めた。私は、母が男性に話しかけたとき、「えっ、何」と思い、一歩下がって見てしまっていた。そして男性に「大丈夫です」と言われたのを見て、「はづかしい、断られとう」と思ってしまった。

「知らん人やんな」

と、私は聞いた。

「知らん人やで、捨てにくそうにしとったやんな、前も別の人に声をかけたことあるけど、「いいです」って言われたわ。」

と教えてくれた。そういえば、男性はひざの上にナイロン袋をのせたまま、車イスのタイヤをまわして移動していて大変そうだった。その上、入れる高さも山盛りであふれそうになったペットボトルの上におくのは、更に大変そうだった。

今まで、見かけたことがあったかもしれないけど、気にしたことがなかった。私ならどうするか。私なら見かけても、私の知らない人、それが、気づかないふりして横切るだろうと思った。リサイクルボックスに入れようと思って私がペットボトルなどを持っていたとしても、少し時間を駐車場でつぶして、その人が終わるまで待たせよう、と思った。

帰りの車の中でもその話題になり、母は「何で、お手伝いしましょうかって声かけるか分かる。」と、聞いてきた。

「知らん」

「小学校の参観日のときに、何かそんな題材あつてそのときに知った言葉やで。」

と教えてくれた。そんなのあつたかな、と、私は全く覚えていなかった。小学校のときに親子道徳の参観日があり、「何かお手伝いできることありますか」という資料で学習したようだ。母はそのときに、この言葉を知り、今までは「大丈夫ですか」と話しかけていたが、それ以後は「お手伝いしましょうか」と言うようになったそうだ。

私もそれを聞いて、とてもいい言葉だな、と思った。「大丈夫です

か」は、何かその人を心配しているようで対等でない。反対に、「お手伝いしましょうか」だと、声もかけやすいし、言われても悪い気がしない。

まわりを見て、困っている人がいたら障害がある人だけに限らず、高齢者や小さな子供そして友達や家族にも、誰に対しても、このまほうの言葉「お手伝いしましょうか」の一言声をかけて寄りそっていくうと思った。

私は、この母の行動をみて、普段の生活の中で無関心だったことに気づいた。何気ない日常のどこにでも、そのきっかけがあり、目を向けるだけで気づくことができるのだ。

今まで見て見ぬふりをして、素通りしていたかもしれないが、自分が手助けできることは、サツと手を出せる人間になること。そして、みんながそういう、見て見ぬふりをしない世の中になり、もっともつと笑顔あふれる社会になればいいな、と思う。



【中学生の部】 奨励賞
「笑顔を繋ぐ短歌」

加古川市立氷丘中学校

3年

なかもと ちひろ
中本 千尋



毎年届く年賀状の中に、すごく達筆な人がいる。僕の知らない人だけど、宛名は母と僕になっている。母に尋ねると病院で知り合った人らしい。全く覚えていないけど、まだ小さかった僕が足の不自由なおじいさんに、待合室で席をゆずったそうさ。その時の僕の様子を、短歌にしてプレゼントしてくれたことが縁で、年賀状のやりとりが続いていると聞かされた。

小さかった僕は、深く考えて行動したのではないと思う。しかし、今同じことをするとしたらどうだろう。席をゆずるまでに、色々考えてしまう気がする。ゆずった方が良いのか、相手はそれを望んでいるのだろうか、親切の押しつけになるのでは・・・

それには理由がある。去年「トライやるウィーク」でお世話になった介護施設での職業体験での経験だ。僕が担当したのは食事や入浴の手伝いだった。入浴介助で背中を流してあげたおじいさんが、「ありがとう、気持ち良かった。」と言ってくれたことが嬉しくて、もっと色々手伝ってあげたいと思った。

何日か過ぎた日に施設の職員さんが、「出来ることまで手伝いすぎるのは良くない。見守るのも大切。」と話していた。何でも手伝いす

ぎると、自分でする意欲が沸かなくなるらしい。出来ることは自分ですることがリハビリになっている人もいる。人それぞれ必要としているサポートが違っているのだ。介護施設だからといって、何もかも手伝うのではないということを知った。

介助や介護を必要としている人は高齢者だけではない。体の不自由な人、脳や視覚・聴覚の障がい、外見だけではわからない内部障がい（内臓機能障がい）もある。生まれつきの人、病気や事故、年齢とともに発生する場合もある。僕や家族にも起こりうる可能性のある身近なものなのだ。

小学生の時に授業で、車イスと目隠し歩行の体験をしたことがある。車イスでスロープの上り下りを押しもらった。下りは勢いがついて少し怖かった。小さな段差でもタイヤが引っかけたり、進むのに苦労した。目隠し歩行は本当に怖かった。友達に手を引いてもらい、白杖という白い杖を持って歩いた。すり足になってしまい、おどろくほど進めなかった。

実際に自分で体験してわかったことなんて、本当に少しなんだろうと思う。何も不自由ない状態で生活している僕たちが、障がいのある人の不便や困難を全て察するのは難しい。

母が言っていた。「関心を持つこと」が大切なのだ。迷惑そうにされたらと、声をかけるのをためらうなら見守るだけでも良い。もし声をかけられるなら、何を必要としているのか聞けば良い。一声かけて、サポート出来ることを伝えるだけでも安心してもらえるのではないだろうか。

僕は父の仕事の都合で、四才まで横浜で暮らしていた。関東は電車

の路線が発達しているので電車を使うことが多く、ベビーカーで出かけていたそうだ。ベビーカーごと乗車できず、片方に僕、もう片方にベビーカーを抱えることもあったという。「ベビーカー運びましようか。」と声をかけてもらい、知らない人に何度も助けられたそうだった。

障がいのある人との介助や介護とは違うが、共通するものはあると思う。少しのサポートでクリアできることがたくさんあることだ。障がいがある人も無くても、同じ社会で生活する一員なのは変わらない。最初に書いた、プレゼントしてもらった短歌は、「うららかな春の光に包まれて かわいい君の 笑顔輝るる」だそうだ。一人一人が関心を持ち、行動することで変化することは多くあるはずだ。一人でも多くの人が、笑顔で過ごせる社会になればいいと思う。



【中学生の部】 奨励賞

「共生社会の実現のために」

加古川市立氷丘中学校

3年

中寺

志保

なかでら しほ



近年、テレビや新聞などで「障がい者」と表記されているのを目にする。「害」という字を使うのは障害のある人を傷つけているのではないかという考えからである。このように、障がい者に対する社会の認識の変化が見られてきたが、未だ多くの課題が残っている。

私は小学生のときから韓国伝統打楽器のチャングを習っている。チャングのチームには精神遅滞、自閉症などの精神障がい者や、視力障害、聴覚障害、重症心身障害などの身体障がい者と一緒に活動している。そのため障害のある人と接することが多く、色々なことを学ぶことができた。チャングは障害の有無に関係なく、みんな同じことができるということを実感している。しかし、差別は生まれてしまう。そこで私はなぜ差別が生まれるのかを考えた。一つは、コミュニケーションの取り方の違いにあると思う。友達とのコミュニケーションの取り方と家族とのコミュニケーションの取り方が違うように、障害のある人とのコミュニケーションの取り方も違う。人々は、このコミュニケーションの取り方の違いによって障害のある人を違う人間として見てしまっている。これらは、障がい者だけの問題ではなく、人種差別などでも同じことが言えるだろう。もう一つは、人々の障がい者に

対する理解が不十分であることだ。法務省による世論調査でも、「障がい者について、どのような問題が起きていると思うか。」という質問に対し、回答は、「職場で不当な扱いをすること」、「人々の障がい者に対する理解が足りないこと」、「差別的な言動をすること」が上位を占めていた。このように、障害のある人に対する人々の理解や配慮はいまだ十分とは言えず、その結果として障害のある人の自立と社会参加が阻まれており、「共生社会」は十分に実現されているとは言えない状況にある。この情報を見て、社会の全ての人々が障害のある人に対して十分に理解し配慮していくことや、社会的な取り組みをすることが必要であると思った。では、今の私たちにできる取り組みには何があるだろうか。私が考えた取り組みは、多くの人が障害のある人と交流することだと思う。交流を通して障害のある人に対するコミュニケーションの取り方を学び、障害のある人の生活を知ること、障害のある人に対する偏見をなくすることができるだろう。

三年前、私の父が脳卒中で倒れ、左片麻痺になり障がい者の家族になった。そのときから私の障害に対する考え方や、障害のある人への接し方が大きく変化した。今まで「障害」とは自分には関係のないことだと思っていた。しかし、急に自分の家族が障がい者になったり、自分自身が障がい者になったりすることもある。だから、自分とは無関係だと思っただけはいけなく、気が付かされた。障がい者の家族になって、冷たい目で見られたり、避けられたりすると、家族も傷つくことを知った。そして差別をしている人たちに自分の言動が多くの人を傷つけていることに気づいて欲しいと思った。父の頑張っている姿を見て、障害のある人は健常者以上に努力をしていると気付いた。私たちは障

害のある人たちのこれまでの苦悩や辛さ、乗り越えるための努力を見ずぐすのではなく、障害のある人たちの努力を見習わなければならぬ。障がい者は見下す存在ではなく、尊敬するべき存在だと思ふ。

私はチャンネルゴの活動を通して、障害はその人の個性であると学んだ。障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重しなければならぬと思った。「差別はしてはいけない」これは、当たり前のことのようにだが、自分が気づかないうちに差別をしているかもしれないということを知って欲しい。そして、「共生社会」の実現のために何をすべきか人々は考えなくてはならないと思ふ。



【高校生の部】 最優秀賞

「共に生きていくために」

関西創価高等学校 1年

田村 勇人
たむら ゆうと



皆さんは「障がい者とは？」と尋ねられたらどう答えますか？

以前の私は、手や足が不自由な人などと考えていました。もちろん間違っているとは思いますが、世の中には、見た目ではわからない障がいのために、理解されずに苦しんでいる人がいるということを知り、弟から学びました。

私の弟は、発達性協調運動障がいと発達性表出性書字障がいの診断を受けています。発達性協調運動障がいとは、手と手、目と手、足と手などの個別の動きを一緒に行う運動や動作が、極端に不器用な障がいです。書字障がいとは、知的発達には大きな遅れはなく、話したり文字を読むこともできるのに、文字が書けなかったり苦手だったりする障がいです。どちらも症状の現れ方や苦手なことは、人によって違うようです。

板書だけを考えても、黒板の字を見て正確に形をとらえて覚え、左手で紙を押さえながら右手で鉛筆を持ち、決められたスペースに入る文字を書くことが必要で、それは弟にとってとても大変なことなのです。

体を動かして遊ぶことは好きなようですが、運動が苦手なので、鬼

ごっこをして鬼になってしまったり、なかなか交代できず、悔しい思いで終わることもしばしばです。下校準備でランドセルに教科書を入れる時に、早くするように言われ、「みんなが簡単やつてもオレからみたらムズイねん！」と傷ついて帰ってきたこともありました。

見た目ではわからないために、理解されにくい。そのことが、弟や同じような生きづらさを感じている人達の苦しみを、さらに深くしているのではないかと思います。

苦手な所は道具の工夫で補っていくよう専門家から助言を受け、学校と話し合い、弟は一年半前から、タブレットで板書を撮影したり、タブレットに書き込んだりしながら学んでいます。新型コロナウイルス感染症の影響で、一気にオンライン授業や授業用タブレットの普及に向けた整備が進んでいますが、当時はまだ、学校でタブレットを使用することに、少なからず壁があったようです。

“目が悪いのでメガネを使う”“耳が聞こえにくいので補聴器を使う”“ということに疑問を持つ人は少ないと思いますが、“文字を書くことが努力してもできにくいのでタブレットを使う”ということは、まだまだ当たり前ではありません。

「当たり前」という言葉をよく使いますが、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったことを、私達は経験しました。中学三年間、共に過ごしてきた仲間との卒業式までの数日が、突然休校になり、ステイホームで友人と会う事や話す事がなくなり、とても悔しいがのこりました。想像とは違った入学式、慣れないオンライン授業、未体験のことばかりで、慣れていくだけで精一杯の日々でした。

今まで当たり前だと思っていたことが、ありがたいことだったと思

ったのは、私だけではないと思います。外出する時はマスクをつけ、フィジカルディスタンスを意識する新しい日常。しかし、様々な報道の中で感覚過敏や様々な事情で、マスクが着用できない人がいる事を知りました。多くの人が当たり前だと思っても、当たり前ではない人もいる。自分にとっての当たり前と、相手にとっての当たり前は、必ずしも同じではないのです。

様々な場面で「なぜそのような言動をとるのだろうか？」と疑問に思った時、一度立ち止まって、相手の立場や気持ちになって考えてみる事が大切だと考えます。見た目ではわからない障がいでも生きづらさを感じている人達に心を寄せ、共に生きる社会をつくるために、私自身小さなことからでも行動を起こしていきます。



【高校生の部】 優秀賞

「偏見のない世の中へ」

兵庫県立龍野北高等学校

2年

なかた あいこ
中田 藍子



みなさんは、「障がい」や「障がいのある方」に対してどのようなイメージを抱いていますか。もちろん、人それぞれ抱いているイメージは違うと思います。私は保育園や小学校、中学校で障がいのある方と関わることはありません。また、出かけた際に、駅やスーパーなどでも見かけることはよくあります。その時に私が一番気になることは、障がいのある方をじっと見つめていたり、ひやかしの言葉を放ったりする、周りの人の言動です。なぜ、そのような態度をとってしまうのでしょうか。それはきっと自分と違うからという、単純な理由だと思います。ですが私は、自分と同じ人間なんてどこを探しても存在しないと思います。私たちは、生まれながらにして誰もが幸せに生活し、そして自分らしく人生を送る権利があります。しかし、障がいのある人は周りからの冷たい視線や言った本人は何気なく放ったつもり言葉に心は深く傷つけられています。きっと、誰であっても傷つくと思います。私自身も心のない言動には傷つきます。そのために、すべての人がどんな時であっても、今から発言することは相手を傷つけないか、嫌な気持ちにさせないか、また態度はどうかを考える必要があります。そうすることで、誰も傷ついたり嫌な気持ちになることがなく

なるのではないでしょう。普段から、少しずつでも、自分自身の言動に注意を向けられると良いと思います。

私は、高校に入学して「福祉」に関する勉強をするようになってから、それまでと比べて「福祉」や「障がい」に対する考えや、思いは変化しました。学ぶ前までは、「福祉」といえば「介護」で、大変やしんどいというイメージでした。約一年半「福祉」について勉強してきた今の私にとって「福祉」とは、人と人とのつながりや幸福、互いへの思いやりだと考えるようになりました。つまり、だれもが幸せに自分自身の人生を歩むということです。これは、すべての人に与えられた権利である為、この権利を守らなければなりません。また、私が思う「障がい」はただただ大変だというイメージでした。確かに大変だとは思いますが、何も知らない私が勝手にそのようなイメージを持っていたということであり、他者のことを全く考えることができていなかったと気付き、今では反省しています。このように勝手なイメージを持つことが、多くの人を傷つけたり嫌な気持ちにさせることにつながっているのだと思います。今の私は、「障がい」があつたとしても、周りの人が優しく声をかけ手助けをするだけで、その方ができなかったことはできるようになると考えます。つまり、そのときにあつた「障がい」はなくなつたということになります。私達が、少し勇気を出して手を差し伸べるだけで、その時にあつた「障がい」は、「障がい」ではなくなるといことが今の私の考えです。また、誰にでも「障がい」というものは存在しています。例えば、私は目が悪いです。遠く物はよく見えません。他にも、高齢者や妊婦は階段の昇り降り等は困難です。しかし、目が悪いのは、コンタクトレンズや眼鏡があ

るため遠くの物もしっかりと見ることができません。高齢者や妊婦の階段の昇り降りは、エレベーターやエスカレーターがあるため、可能になります。このように、道具や周囲からの手助けがあるだけで困難も可能に変えることができます。つまり、「障がい」も「障がい」ではなくなるということになります。誰もが人の助けを必要としているだけです。

私は今後、福祉を学び、そして福祉に携わる者として、困っている方にはそつと手を差し伸べ、寄り添うことのできる人を目指します。そのために、普段の日常生活の中で、「誰かの力になりたい」という思いを大切に行動していきたいです。偏見のない世の中になることを心から願っています。

【高校生の部】 優秀賞

「障害という壁」

兵庫県立日高高等学校

2年

田中 真由



私は元障害者である。今は手帳の更新を止めたため、肩書上では障害者ではない。

「障害者」私はこの単語が嫌いだ。その意味ではなく、言い回しが気に入らない。特に『害』という漢字がとてつもなく嫌いだ。それは害虫や有害などあまり良い意味を持つ漢字ではないからだ。

私は、小学校に入る前に検査を受けたことを覚えている。確か、パネルを並べたり、手本の図を見て、板を並べる等、基礎知識がなくても出来るものだった気がする。幼かった私は、楽しみながらやっていたのだろう。何も分からずにいた。ここまでは良かった。

違和感に気づき始めたのは、小学校四年生ぐらいの時だ。段々と色々な事を理解していく中で、私は気づいてしまった。

その頃の私は考え出したら止まらず、どんどん深みにはまっていった。苦しかった。辛かった。見えない壁があるようで、こんな手帳なんて破り捨ててしまいたかった。自分のどこが欠落しているのか、健全者と呼ばれる人とは何がどう違うのか、分かりたいようで分かりたくなかった。幼いながらも私は、その狭い世界の中で絶望していた。普通の人と違う分、普通の人生を歩めないのだ。無性に泣きたくて、

怒りたくて、でも誰にも言えなくて、自分は何故障害者なのか、検査の基準が知りたかった。半ば全ての失敗を「自分は障害者だから」と諦めていた時期もあり、「ああ、私は将来、誰かに世話を焼いてもらって、自立なんてできないのだろうな」と考えていた。

簡単に言えば、普通の人と違う事が嫌いだっただと思う。療育手帳を親から持たされた時、「何で持たなきゃいけないの」と自分から障害を認めたくなかった。親から持たされたという事実と知的障害という裏付けの証拠が一段と辛かった。「クラスにも自分と同じような人がいるのになぜ」と疑問しかなかった。友達に相談しても分かってもらえるような気がせず、むしろ馬鹿にされて壁をつくられてしまう気がした。大人にも相談したくなかったし、そういう学級に入る気は毛頭なく、『障害者だから』という扱いが大嫌いで、障害者という分類から逃げたかった。

中学生にあがった頃、児童福祉士の訪問回数が減った事や、自分が成長した事もあり、私の心に少し余裕ができていた。しかし、思春期ということもあり、障害者という縛りから逃れたい気持ちには変わりはない。しかし、ある時を境に、私は福祉系高校へ進学する事を決めた。多分ヘルパーさんの仕事を見ていたからだと思う。常に明るく、人のために奉仕して、恩にきせない姿を見て、自分の心の中で、何かがふつきれたのだと思う。障害があっても無くても生きていく世界は変わらない。

障害者には三つの壁があると思う。一つ目は、身体面や精神面でのハンディだ。二つ目は、周りの人との壁。やはり『普通と違う』という周りの目があると思う。三つ目は障害者自身の心の壁だ。多分、障

害者の誰もが、心のどこかで『自分は障害者だから』と考えたり、落ち込んだり、諦めたりした事があると思う。

障害がある人と関わる時には、何かしてあげたいという考え方や、互いに支えあっているという考え方を持つ方が良いと思う。一方的な支援は誰もが受けたくない。障害によって誰かの力を必要としても自分でできることは自分で考えて行動したいのだ。障害者という色眼鏡で見る前に、同じ一人の人間として接してほしい。障害のある人もない人も色々な壁をとつばらつて、みんな支えあい、共生している社会を作っていきたいと思う。『相手を理解する事』これが心の距離を縮める第一歩ではないか。苦しみや辛さを経験してきたからこそ、寄り添えることもある。これから社会に出た時に、相手を理解できる支援者となるよう勉強に励みたい。そして、これを機に私は後ろめたい気持ちを捨て、堂々と生きていきたいと思う。



【高校生の部】 奨励賞

「普通って何？」

兵庫県立龍野北高等学校

1年 時澤 天空

ときざわ そら



私が通っていた中学校のすぐそばには、養護学校があります。今回は、その養護学校での話をしたいと思います。

私が中学一年生の時、校内の合唱コンクールで歌唱した曲を、養護学校で歌わせていただくことになりました。私は母が介護福祉士のため、その頃には障害のある方を特別意識することはありませんでした。ですが、実際に歌唱が終わり、中学の自分の教室に戻った時のクラスメイトの障害者への偏見を耳にし、少し驚きました。

中学三年の時、私は吹奏楽部に所属していましたが、養護学校でのイベントで演奏の依頼がありました。その時の顧問の先生の選曲に、私は少し嬉しくなりました。普段は最近の流行曲を演奏することが多いのですが、誰もが知っているであろうジブリの曲やディズニーの曲を先生は選曲されました。音楽を楽しんでほしいという先生の思い。その思いに私は心があたたかくなりました。更に、顧問・副顧問の先生方は共に養護学校のような職場で教員をしたことがあると聞き、納得しました。

一つ目の中学一年の時の出来事は、少し残念に感じてしまいました。それは耳にはさんだ偏見が、「歌詞なんか理解できるのかな」という

話をしている人が多かったです。養護学校には、知的障害者ももちろんおられますが、身体障害の方もいらつしやいます。「障害者は知能が低い」という勝手な考えに、少し残念に思いました。

それに対し、部活では、「偏見」とは違い、「心遣い・気遣い」の大切さに気付かされ、ほっこりした気持ちになりました。

「偏見をなくそう」と口では言ってもやはり根底に残っている部分は変わらないと私は考えます。そもそも「障害」という言葉があることにも私は不思議に思っています。そのような差別、区別をつけるような言葉があるから、特別な人と認識してしまうのではないのでしょうか。だからと言って、この言葉がなくなることも、世界から偏見が完璧に消え去ることも絶対に無いと私は思っています。人の考え方は、それぞれ違います。私のような考え方の人もいれば、私とは違って大きな偏見を抱えている人もいます。それは本当にどうしようもないことだと思います。そのため、私は考えました。

「偏見をなくす」のではなく、「理解を深める」ということです。「障害」という言葉や、偏見をなくすことはなかなか困難です。そのため「理解を深める」ことで社会が支え合って、安全に、幸せに暮らすことができると思います。

ここでタイトルを思い出してください。この文章のタイトルは「普通って何？」です。皆さんの思う「普通」とは何ですか。一般的、珍しくないこと、と表されることが多いと思います。私は、「普通」とはあいまいで不確かだと思っています。はっきりとした基準が無いじゃないですか。皆さんはどう思いますか。

多くの人が障害のある方を特別に見る理由は「普通でないから」と

考えているのではないのでしょうか。私はその人たちに声を大にして聞きたいことがあります。

「普通って何？」



【高校生の部】 奨励賞

「普通とは何か」

兵庫県立龍野高等学校

3年

たききた
瀧北

ゆうき
有希



普通とは何か

「普通じゃない」

その言葉が障害者に向けられているのを見る度に悲しくなる。しかし、この言葉は何度も聞いた言葉だ。それがどれだけ軽率な発言で相手を傷つける言葉なのかに気づけたのは小学六年生の時だ。

六年生の卒業式の練習の時、在校生として別れの言葉を言ってくれた生徒のなかに言語障害のあるSちゃんがいた。Sちゃんは「キ」や「イ」など、イの段の発音が上手く言えず聞き取れないことがあったが、一生懸命な様子や完璧に暗記された言葉から誠意が伝わってきた。しかし、ある先生が式の練習を止めて、発音の間違いを指摘し、皆の前で何度も言い直しをさせた。「なんで普通に言えないんだ」と言われ、Sちゃんは泣いていた。次の日の練習で、Sちゃんが言うはずだった言葉は違う子の声が変わっていた。

発音が少し違っていても、Sちゃんの誠意や一生懸命な声は他の子と同じだった。だから悔しそうに声を震わせながら何度も言い直す様子を見て、「なんで普通に言えないんだ」なんて軽々しく言っている言葉ではないのだと気づいた。

総合福祉科に入学し、障害について学んだ今、「普通じゃない」という発言をする人がいればそれは違うよと言えるようになった。それは「普通じゃない」は障害がない人の固定観念による勝手な見方だと思っようになったからだ。

実際、私も固定観念から、障害者スポーツで活躍している方を見ると「障害があるのに凄い」と思うときがあった。しかし、あるリハビリテーション施設に介護実習に行った時、施設の職員さんに「障害があるのに出来て凄いいんじゃないよ、障害がない人達と同じように練習して極めたから凄いいんだよ」と教えてもらい、自分の考え方の間違いに気づくことができた。

同じように障害者に対しての「普通じゃない」という考え方は障害がない人にとっての狭い「普通の世界」を押し付けているだけなのだと思う。

私は総合福祉科で沢山の新しい知識を学ぶ度に自分の世界観がひろがっていくことを実感する。私も障害という広い世界のほんの少ししか理解していないかもしれないけれど、相手を知ろうとすることが心の輪を広げることにつながるのだと思う。



令和2年度 障害者週間のポスター 入賞作品



最優秀賞



「主役」

加古川市立平岡中学校 1年 ^{シミズ ユノ} 志水 結乃

(作者コメント)

障害者であっても、一人一人が平等に輝けるようにという想いでこのポスターを描きました。この想いをより多くの人に届いてほしいと思っています。

優秀賞



「君の手と少しの勇気で繋がる心」

加古川市立氷丘中学校 2年 ^{イトウ ヨハク}伊藤 瑚白

(作者コメント)

今回、障害者週間のポスターを描いてみて、障害者の方が普段の生活の中でどのようなことに困っていて、どのような手助けを必要としているのかを考える良いきっかけになりました。私も困っている障害者と出合った時には、勇気を出して声を掛けてみようと思いました。

優秀賞



「きづいてほしいサインがある」

加古川市立氷丘中学校 2年 ホリウチ ヨウタ 堀内 煌太

(作者コメント)

このポスターを見た人が「こんなサインがあるのか」と思ってもらえるような内容にしました。

奨励賞



「心を1つに」

加古川市立山手中学校 2年 ^{ナカイ} 中井 ^{ナナミ} 菜々美

(作者コメント)

障害がある人もみんなと一緒に取り組んで、笑顔あふれる世界になってほしいなと思いながら描きました。

奨励賞



「やさしさが心の段差をなくす鍵」

加古川市立氷丘中学校 3年 ^{ワダ}和田 ^{ヒナタ}向日葵

(作者コメント)

「さまざまな身体障がい等をお持ちの方を皆がやさしく・平等にサポートできる世の中に」というテーマで描きました。

発行：兵庫県健康福祉部障害福祉局障害福祉課

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目 10-1

TEL 078-341-7711

FAX 078-362-3911